

天空の郷 多羅尾ガイドブック

～多羅尾氏と代官陣屋跡～

多羅尾には守りたい風景

▲ 御斎峠から見た伊賀盆地にかかる雲海

伝えたい歴史があります

△ 滝の脇 磨崖仏

△ 多羅尾代官陣屋 表口

多羅尾とその地名

多羅尾(たらお)は、甲賀市の最西南端、三重県と京都府境に位置し、標高450mから600mの山々に囲まれた高原です。

一見、山奥の寒村にみえますが、古くより京都から御斎峠(おとぎとうげ)を経て伊賀に抜ける主要道「京街道」を中心として甲賀、伊賀上野、南山城方面を結ぶ道路が交差する要衝として栄え、昭和初期の最盛期は1000人近い人々が暮らす大きな集落でした。

その地名の由来について、諸説ありますが、山菜の王様といわれる「タラノキ」がたくさん繁っていたとする伝承があります。

多羅尾が所在する「信楽」(しがらき)も「しげる木」が地名になったと言われていることから、山間の豊かな林の様子をその地名にしたことが考えられます。

なお、タラノキは、森林伐採などで明るくなった場所に最初に生えるパイオニアプランツと呼ばれる植物で、多羅尾の地が早くから開発されていたことを示す地名なのかもしれません。



△ タラノキ

信楽と多羅尾の歴史

信楽の地名は、今から約1270年前の奈良時代中頃に、聖武天皇によって紫香楽宮(しがらきのみや)が造営されたことが初めて文献に書かれています。

また、東大寺の大仏殿の副柱を信楽から切り出したことも記録され、良材の産地として信楽の開発が始まったようです。

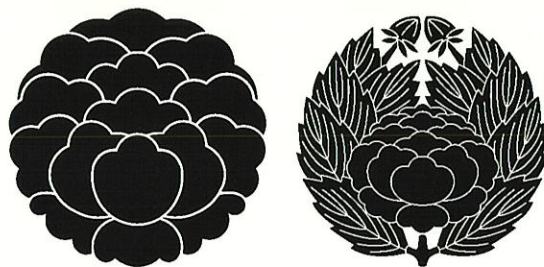
平安時代末頃(約950年前)頃から「信楽荘」として文献に登場し、鎌倉時代半ば(約760年前)には、名門貴族である近衛家の荘園として「信楽荘」が記録されています。

約550年前の応仁の乱(1467-77)頃になると、多羅尾を含めた信楽荘は、近衛家が直接支配ができ、家計を支える重要な場所として、たびたび近衛家当主が直接現地に赴き経営に乗り出します。

その頃、多羅尾氏は、近衛家の荘官(荘園を管理する現地支配人)の1人として活躍したことが近衛政家(まさいえ)の日記『後法興院記』に記されています。

その中には、室町幕府の8代將軍足利義政から、近衛家に信楽榎13本を納めるよう命令があり、多羅尾氏に京へ届けさせたという記事や応仁の乱の戦火が京都の邸宅に及ぶのを恐れて、近衛邸警護のため信楽荘から50名の郷民を上洛させたという記事もあります。

多羅尾氏の家紋は、「大割牡丹」または「抱き牡丹」とされ、近衛家の家紋である牡丹を強く意識しているようです。



△ 多羅尾氏の家紋 左 大割牡丹 右 抱き牡丹

コラム 応仁の乱と多羅尾

応仁の乱の戦火を避けて近衛政家が小川の大興寺(大光寺)に滞在中、政家の弟、道興(どうじょう)が、將軍候補の足利義視と伊賀で面会した帰りに「多羅尾館」を経て、兄を訪ねたとあることから、多羅尾の地に多羅尾氏の居館が構えられていたことが判ります。

その後、伊賀守護の軍勢2000人とともに義視が上洛するため信楽に入り、多羅尾の「龍泉寺」に宿泊したので、政家は、「龍泉寺」で義視に拝謁したのち、弟と「多羅尾館」で歓談したことが『後法興院記』に記されています。

この頃には、多羅尾には、立派な寺院や居館、大勢の人が通行できる道路も完備していたようです。

江戸時代以前の多羅尾氏

多羅尾氏は、近衛経平(1287-1318)の庶子、高山師俊(もろとし)を祖と称して、代々近衛家の信楽荘の荘官として活躍し、次第に在地領主としての力を蓄え、戦国期には、その勢力を山城方面に拡大し、甲賀武士の中でも有力国人としての地位を築きました。

天正10年(1582)の「本能寺の変」に際して、多羅尾家当主の光俊(みつとし)が、堺に滞在中の徳川家康の逃走を助け、いわゆる「神君伊賀越え」に際して伊賀甲賀の道中警護に尽力しました。

その後、豊臣政権下で秀吉の甥で関白(かんぱく)だった豊臣秀次(とよとみひでつぐ)の自刃に連座して、多羅尾氏は改易されますが、江戸幕府が開かれると、家康の危機を救った功績が認められ、光俊とこの子たちが旗本に取り立てられます。

多羅尾一族の領地は4000石を超え、信楽の過半を領有するとともに、慶長5年(1600)に光太(みつもと)が信楽に帰還し、併せて代官に任じられます。

以降、明治になるまで、多羅尾家当主は世襲代官として10代にわたって多羅尾に陣屋を構え、近江・河内・伊勢・大和国の幕府の直轄領を治めました。

徳川家康の伊賀越えと多羅尾氏の活躍

多羅尾氏に関して忘れてはならないものに「神君伊賀越(神君いがごえ)」があります。

天正10年(1582)5月に信長の招きで安土城を訪れた家康は、信長に堺見物を勧められ、主だった家来だけをつれて堺を訪れ当時の外国貿易の様子等を見学しました。

その帰路、6月2日に堺を発ち京都へのぼり信長と再会しお礼を述べて本国の三河へ帰ろうと枚方まで来たところ、京都から連絡が入って今朝早く、信長親子が明智光秀に襲われ本能寺であえなく最後を遂げたことがわかりました。

家康は、光秀がこの際に、家康をなきものにしようと考えているに違いないと考え、危険を逃れまっすぐに三河に帰ることになりました。

しかし、本街道は光秀の軍勢で通ることができません。そこでしかたなく間道づたいに河内の山を越え大和の国から山城国に出て、木津川を渡りやつのことで宇治田原に着きました。

宇治田原の城主、山口甚助と藤左衛門(養子)父子は家康一行をもてなし、早速に藤左衛門の実家である多羅尾の父や兄のもとに早馬を出し連絡をしました。驚いた光俊(みつとし)は二男の光太(みつもと)、三男光定(みつさだ)を迎えに出し、藤左衛門とともに多羅尾城内に案内しました。

家康は用心深い人でなかなか城内に入ろうはしませんでした。名物の干し柿や新茶をだしてねぎらいましたのでようやく安心して城に入りました。

光俊は、家来に命じて、各峠を固めさせ怪しいものは一人も多羅尾へ入れないようにしましたので、家康一行は堺を発って初めて一晩ぐっすり休むことが出来ました。

翌朝、早く家康一行は光俊の倅、光太、光定、藤左衛門とその家来に守られ、お斎峠に出て伊賀の様子を伺いました。そして、そこから道を大沢にとって、間道づたいに比叢河(そがち)内から音羽(おとわ)に下り、丸柱を左にみて、柘植に向かいました。その間、何回となく襲ってくる野武士や山賊を倒しながら柘植に着き、加太峠を越え、関に出て伊勢国白子浜に無事着くことが出来ました。

家康は、多羅尾兄弟にそれぞれ太刀をお礼に送り落ち着いたら是非三河に出てくるように言って、皆と別れ、船で三河国へ帰って行きました。

これを「神君伊賀越の難」と言い、家康の一生の中で一番危険で苦しい出来事であったと言われています。

このことから、家康と多羅尾一族は、一層仲の良い間柄となり、家康が江戸に幕府を開き成功した後は、皆呼び出され旗本に取り立てられ、領地を貰い家康に仕えるようになりました。

多羅尾氏が多羅尾に居住し代官という要職にあり続けることができたのは、伊賀越えでの家康への貢献がいかに大きな意味をもっていたかが分かります。

(多羅尾歴史物語より引用)

江戸時代の多羅尾氏

多羅尾氏が信楽代官を勤めるようになるのは、慶長(けいちょう)5年(1600)の関ヶ原の戦いの後、光太(みつもと)が任じられて以降で、光好(みつよし)―光忠(みつただ)―光頭(みつあき)―光豊(みつとよ)―光雄(みつお)―光崇(みつたか)―氏純(うじひろ)―純門(ひろかど)―光弼(みつすけ)と続いて幕末にいたります。

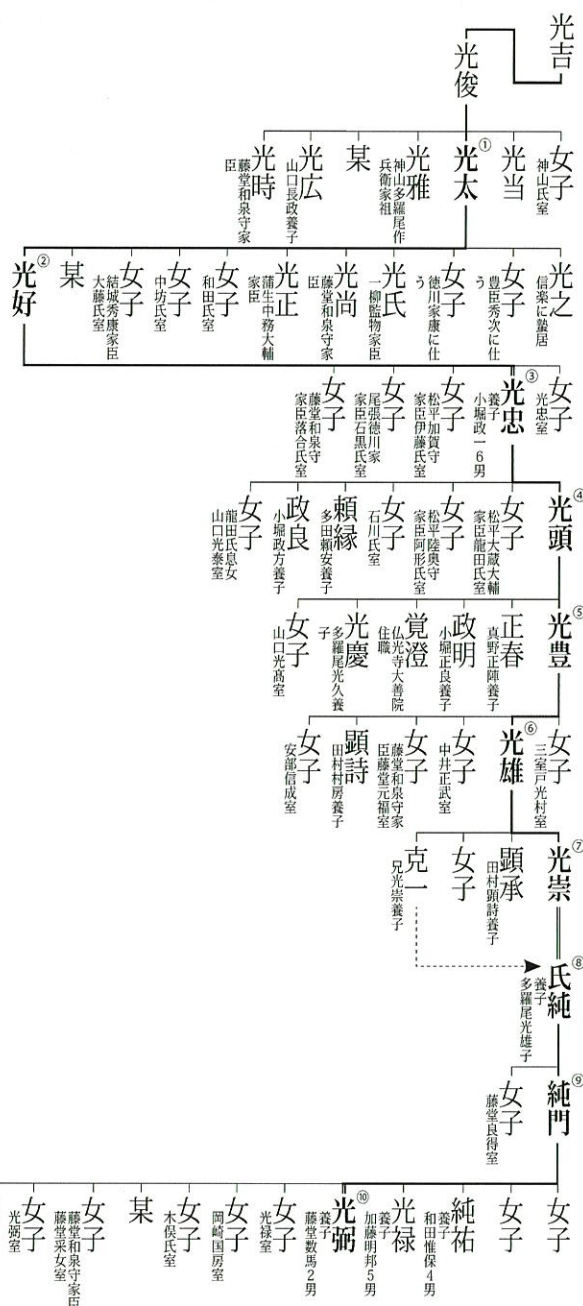
また、光太の兄弟も多羅尾村の隣村神山(こうやま)村に弟光雅(みつのり)と朝宮村に山口光広(やまぐちみつひろ)、多羅尾光時(みつとき)が別に家建て、旗本となって拠点を構えるなど、信楽における多羅尾氏の影響力は大きかったことがうかがわれます。

多羅尾氏の嫡流となった多羅尾代官家の家臣団には、「年寄(としより)」から「足軽(あしがる)」までの6つの序列が設けられ、序列に応じた役職が与えられました。

代官の仕事や所領経営に大きな役割を果たした「手代(てだい)」は、家中でも上位の給人席・近習席の者が勤め、無足人(むそくにん)と呼ばれる在村の百姓たちは徒士格や足軽を勤めていました。

多羅尾氏が幕府から預かる石高は時代によって変動しますが、5万から6万石、純門の時には10万石を超え、天保10年(1839)には、多羅尾の代官所に22名、伊勢県四日市の出張陣屋に2名、江戸の九段下にあった江戸屋敷に9名の計33名の家臣がいたことが記録されています。

また、東海道の宿場町、土山宿にも出張陣屋が設けられ、必要に応じて家臣を派遣していました。



△ 多羅尾氏家系図 (代官家)

代	当主名	通称・官途名	代官任期	備考
1	光太 (みつもと)	彦市 久右衛門 左京進	慶長 5 年 (1600) ~ 寛永 6 年 (1629)	
2	光好 (みつよし)	久三郎 久右衛門	寛永 6 年 (1629) ~ 寛文 7 年 (1667) 11/12	寛文 7 年 (1667) 代官罷免 寛文 7 ~ 9 年 (1667~69) 閉門
3	光忠 (みつただ)	右京 四郎右衛門	宝永 3 年 (1706) 2/16 ~ 享保 10 年 (1725) 4/3	貞享 2 ~ 3 年 (1685~86) 閉門、小堀政一6男
4	光頭 (みつあき)	四郎五郎 次左衛門	享保 10 年 (1725) 12/21 ~ 享保 17 年 (1732) 12/9	
5	光豊 (みつとよ)	求馬 四郎右衛門	享保 18 年 (1733) 6/2 ~ 明和 7 年 (1770) 9/13	
6	光雄 (みつお)	右京 縫殿 四郎右衛門	明和 7 年 (1770) 9/13 ~ 安永 3 年 (1774) 11/28 天明元年 (1781) 7/21 ~ 寛政 10 年 (1798) 3/4	安永 3 年 (1774) 代官罷免、 安永 3 ~ 4 年 (1774~75) 出仕とどめ
7	光崇 (みつたか)	加壽雄 四郎次郎	寛政 10 年 (1798) 3/19 ~ 文化 11 年 (1814) 7/17	
8	氏純 (うじひろ)	織部 鞠負 久三郎	文化 11 年 (1814) 7/17 ~ 天保 8 年 (1837) 6/24	6 代光雄子
9	純門 (ひろかど)	久右衛門 民部 主税	天保 8 年 (1837) 6/24 ~ 慶応 3 年 (1867) 6/28	
10	光弼 (みつすけ)	織之助	慶応 3 年 (1867) 6/28 ~ 明治元年 (1868)	藤堂数馬 2 男

△ 多羅尾氏歴代代官一覧

代官職と旗本としての多羅尾氏

代官の仕事は勘定奉行の配下に属し、幕府直轄地(天領)の年貢の徴収だけでなく、その土地の行政や経済政策の実行、治安、訴訟など全てを担当する役職で、高い実務能力が求められたため、多くの場合は優秀な人物を年限を限って任命していました。

多羅尾代官のように、代々代官に任じられたのは、葦山代官の江川氏、大津代官の石原氏などごく少ない家だけです。

また、旗本とは、200石以上1万石未満の石高を与えられた徳川將軍の直臣で、5000家を超えていますが、1000石以上の旗本は全体の5分の1以下で、かつ領地を与えられている旗本はさらに少数派です。(大半の旗本は江戸に居住し、扶持米と呼ばれる米を支給され支配地は持ちません。)

多羅尾氏の所領の1500石は、長野(ながの)村の一部、柞原中(ほそはらなか)村(現中野(なかの)区)、柞原下(ほそはらしも)村(現柞原区)の一部、杉山(すぎやま)村、畑(はた)村、多羅尾村の計6カ村にあり、自らの支配地として村の営みに深くかかわっていたことが残された古文書から伺うことが出来ます。

多羅尾氏は代官職を世襲し、領地に居住する旗本という2つの意味で特別待遇を得ていたと考えられます。

なお、テレビや映画では、代官は悪役として登場することもしばしばですが、幕府にとっても安定した直轄地の運営は重要な問題であるため、現実の代官には不正が起きないように何重にも審査や監査を行う制度を設けるとともに、地域との馴れ合いを防ぐために、比較的短期間で代官を交代させるなど、現代にも通じる様々な措置が取られました。

代官陣屋跡について

江戸時代を通じて多羅尾氏の居館であった代官陣屋跡は、記録では「信楽役所」、「信楽陣屋」とも呼ばれ、多羅尾氏の旗本屋敷兼信楽代官所という2つの役割を持ち、伊賀と京都を結ぶ京街道と南山城方面に向かう道が交差する交差点に面した多羅尾谷の山麓に位置し、6000坪を超える広大な敷地があります。

また、陣屋跡を囲むように周辺の古殿・城山・和泉垣外の山上には砦跡とみられる曲輪群が存在することから、この場所が中世以来の多羅尾氏の本拠地として機能していたと考えられます。

敷地のほぼ中央東側に正面口が設けられ、通路を挟んで北側の上段と南側の下段に分かれ、さらに上段北端には裏門があり、陣屋の北側一帯は多羅尾氏に仕える家臣の屋敷が連なっていたようです。

代官陣屋の敷地は、南北にやや弧を描くようにのび、最も大きな空間をもつ上段南半に代官所としての機能が、北半は多羅尾氏の居宅としての機能があったようで北端には庭石と池で構成される庭園があります。

現存する建物はありませんが、聞き取りや現地調査によって、代官屋敷の主屋、表庭園、裏庭園、蔵、墓地などの位置がそれぞれ比定でき、明治後期から昭和初期頃に撮影されたと推測できる2枚の古写真によって茅葺の主屋に格式の高い瓦葺の玄関を備えていたことがわかります。現存する類似施設として神奈川県伊豆の国市に所在する葦山代官所の建物があり、武家風の造りではなく、大きな農家造りの建物であったようです。



△ 多羅尾代官陣屋跡の全体配置

代官陣屋跡の見どころ

表門から陣屋内に入ると、道の両サイドに数本の大きな花崗岩の石材がありますが、本来は滝川(たきがわ)に架けられた橋の部材で、戦乱の時代には川が堀の役割をしていたようです。

また向かって右奥にある石垣は、代官陣屋の中心区画である「上段敷地」に続く坂道に沿って設けられ、切込みハギと言われる切石積の極めて精巧な造作です。

石垣が造られて150年以上経過しても目地には殆んど隙間もない精緻な造りは、代官職の格式の高さと多羅尾氏の経済的な豊かさを窺い知る貴重な資料です。

明治後期に撮影と推定できる古写真Ⅰには、最後の代官を務めた光弼(みつすけ)氏の姿もあり(中央奥、馬の右側の人物)、石垣の上と表口途中の北側平坦地には建物が建っていました。

「上段敷地」の構造は、詳しく判っていませんが、古写真Ⅰより新しい時期の撮影と推定される古写真Ⅱから、その一部が推測できます。

中央に写る建物は代官陣屋の主屋とみられ、中心部分は大きな茅葺屋根があります。さらに左側奥にも瓦葺き建物があることから、長大な瓦葺の東西棟に、豪農風の茅葺南北棟が連結し、正面には入母屋造りの玄関を設けるなど代官所としての格式の高さを示すように造られていたようです。

多羅尾家に残る記録から、嘉永2年(1849)に小書院の建替えされたこと、北庭園の天満社の棟札の年号や石灯笼に「藤原純門」の記名があることなどから、多羅尾純門が代官職にあった天宝8年(1837)から慶応3年(1867)の間に陣屋全体が修築された可能性が高いと考えられます。



△ 写真Ⅰ 表門で撮影された古写真(明治30年代頃撮影) デジタル処理後、彩色をしています。

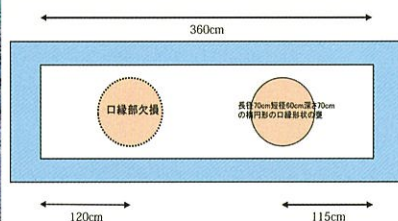


△ 写真Ⅱ 代官陣屋上段の古写真(大正～昭和初期頃に撮影) デジタル処理後、彩色をしています。



△ 玄関床下に埋められた2つの甕

正面玄関の床下に設置され、能舞台のような音響装置と推定しています。他には北海道の五稜郭の箱館奉行所跡だけで類例があるだけで貴重な資料です。



△ 上段敷地に所在する北庭園の平面図

上段敷地北端に所在する北庭園の状況です。

庭内には溜池が残っていますが、元々は水があったことが調査で明らかになっています。

また、残された庭園木の樹齢から約140年前に作庭されたと推測でき、苑内には小社が3社配置されるなど、江戸後期の神道の盛隆を取り入れた特徴のある庭園です。

伝えたい多羅尾の魅力 (イラストマップに場所を表示しています)

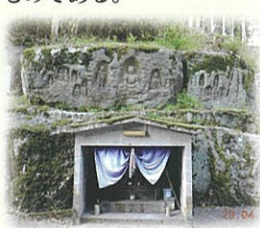
A 仕置場跡(処刑場)

多羅尾代官所の処刑場跡がある。
多羅尾では果ての20日と言われる12月20日に牢屋から出された罪人が裸馬に乗せられ役人、足輕、小者村役人と行列を組み、陰道へて本通りの月ヶ休場までの、約1里半を歩いて処刑場に着いたと伝えられている。
毎年地元区役員により清掃、草刈りと法要が営まれている。



D 滝の脇の磨崖仏

この磨崖仏は茶屋出バス停より大戸川に沿って東に100メートル下る、道路の北側に横長の大きな岸壁を造っている。
この巨岩に阿弥陀如来像や地藏菩薩、不動明王等大小様々な仏像や五輪塔が合わせて21体刻まれている。
この磨崖仏は石仏として古いもので正中2年の年号から鎌倉末期のものであり、大きさも他に類を見ないものである。
甲賀市指定史跡



G 里宮神社

鎮座地 多羅尾宮の谷2116-7
祭神 素戔鳴命
由 諸

近衛家の支流高山太郎師俊が多羅尾を領し嘉元元年紀伊の国那智新宮より大神をお迎えし里宮神社と称し今日に至る。
祭礼
祇園祭りの花取りは華麗で勇壮であり各地区から奉納された色鮮やかな花を奪い合う様は、伝統行事として地域に連綿と伝承されている。毎年7月第3日曜日午後開催



B 高宮神社

鎮座地 多羅尾字六角646番地
祭神 天照大神、火産靈神
由 緒

当社の起源は、推古天皇の時代天照大神の鎮座の地を求めて、皇女倭姫命が各地を巡航中に、伊賀の国より垂仁4年淡海の国甲可日雲宮に4年間皇大神を奉祀されたと日本書紀に記載されている。
倭姫命が坂田宮に移られた後日雲岳の麓に社を建て、皇大神を奉祀し神明宮または高宮権現とした。
大正4年 近衛文麿の参拝記録がある。
平成15年 国有形文化財



E 浄願寺

所在地 多羅尾1975番地
本尊 阿弥陀如来
由 緒

元和元年8月 多羅尾左京進光太の夫人が病死したのでその菩提を弔うために建立し、多羅尾家の菩提寺とした。
寺紋は近衛家より授かった懷牡丹が用いられている。
寺宝 木造聖観音立像
本像は恵信僧都の作と言われ本寺の秘仏(客仏)として安置されている。
元は多羅尾平楽寺(廃寺)の本尊で、信長伊賀攻めの折り、光俊によって伊賀の名利平楽寺から多羅尾に移された。
国指定重要文化財



H 瀑谷の不動明王

上出の家外れより約500メートル瀑谷の入り口に、屋根型に張り出した岩の下に忿怒の不動明王が祀られている。
昭和28年の大水害時のあの怒濤の山津波、濁流に流されることなく無事におられたことは、正に奇跡と言わねばならない。
ここは、往古の多羅尾の12景にも詠まれている。



C 岩洞の不動明王

不動明王は岩洞山不動寺(廃寺)の本尊である。弘法大師が来られしおりに、刻まれ、自らお据えになられたと記録がある。石仏不動明王は現存しており、不動尊として今も地元で厚い信仰がされている。



F 十王地蔵

この十王地蔵は御斎峠までの字月ヶ休場というところにあったが、大正年間に浄願寺に移されている。一体足りないのは、徳川家康伊賀越えの折、自分の身代わりに駕籠に乗せて難を逃れたと伝えられている。



※見学に際して、お寺に参拝の声掛けをお願いします。

I 一石六体地藏

この一石六体地藏は西出の人家外れにあり、境神としての意味を持つものと考えられ、山城の国から近江の多羅尾の在所に入り込んでくる悪者や悪病、悪霊から村人を守る位置に祀られたものである。識者によればこの六体地藏は県下では数少ないもので室町時代以前のものであると言われている。



天空の郷 多羅尾

自然満載
TARAO

